

勸進帳

## 主従の信頼関係・ 義経と弁慶⑥

一龍斎貞花  
講談師

主人源頼朝の疑い深い性格を察することなく、後白河法皇から檢非遺使左衛門尉の位を勝手にもらい、その上法皇のお声掛りで白拍子静を側室にするなど、義経は、大敵平家を倒したことで己を見失っていたのかもしれませんが。頼朝の怒りをかけて一転追われる身となり、愛妻静とも別れた義経は、一時比叡山延暦寺の塔頭にかくまわれていましたが、ここも安住の地ではなく叡山を降り琵琶湖を船で北陸へと逃れます。

へ旅の衣は鈴懸の露けき袖やしおるらん、都をほかの草枕日もいつしかに越路の末、帰洛をいつと定むべき 逆艫のかたき取揖に あはれ戦功並びなき九郎判官義経も 世の仇波にゆられつつ。

山伏に姿を変え、鎌倉幕府の命により

あらた  
新に設けられた関所はなんとか通り抜け  
やがて安宅の関へと掛かって参ります

### 安宅の関 弁慶の勸進帳

弁慶は義経に荷物を背負わせ、供の  
こくりき  
強力と見せかけ

「我等南都東大寺大仏殿建立のため諸国  
を勸進致す山伏でござる、何卒関所をお  
通し下さるよう」

関守富樫左衛門泰家、早くも怪しき山  
伏の一行と

「大仏殿建立とあらば当所をお通し申そ  
うが 勸進帳所持いたすであろう」

「いかにも所持つかまつる」

「しからば勸進帳、お読み候え」

読めといわれて弁慶一瞬当惑した。も  
とより所持しておりませんから 読める  
わけがないが すぐに気を取り直し弁慶  
平然として

「心得え申した、それにて聴聞あれ」

おい  
笈の中より取り出せし一巻の巻物高々  
と取り上げ、「頭が高い」「へへーッ」番  
卒一同その場にひれ伏します。

「それつらつらおもんみれば、大恩教  
主の秋の月は涅槃の雲に隠れ、生死長夜  
の永き夢驚かす人もなし、ここに中頃帝  
おわします。御名を聖武天皇と申上げ奉  
ります。最愛の\*夫人に別れ、恋慕やみ  
がたく<sup>ていきやうまなこ</sup>涕泣眼にあらく<sup>なんだ</sup>涙玉を貫く思  
いを善路にひるがえし、<sup>じょうきやう</sup>上求菩提のため  
<sup>るしやなぶつ</sup>盧遮那仏を建立す、しかるに治承の頃兵  
火にかかり焼亡しおわんぬ 俊乗坊重源

勅命なこうむって諸国を勧進す 一紙半  
銭の奉賤の輩は 現世にては無比の楽を  
誇り 当来にては数千蓮華の上に座せん。  
婦命稽首敬って申す」

(※夫人に別れは、光明皇后が死去した  
こと。離婚ではありません)

読み終えるや、白紙の巻物急いで巻納  
めます。

「よし、勧進帳聴聞した上は疑いなし、  
イザお通り候え」

一行喜んで通り過ぎようとするのを、  
一人一人眺めておりました左衛門

「待て、その強力待てっ」

義経が呼び止められましたから一同  
ハッとしたが弁慶は

「此の強力に何か御用でございますか」

「その強力、義経の面相に似ておるゆえ、  
吟味致す」

「ハハッ、エイまた此奴のためにとん  
だ迷惑をいたす。いやどこの関へ参って  
も義経公だ、判官殿よと間違えられその  
言い訳にどれほど手間取ったかしれませ  
ぬ、此奴身分に似合わず上品な顔つきを  
致しおるゆえ幾度も幾度も迷惑を掛けお  
るわ、この品の良い顔が癩にさわる、エ  
エイどうしてくれよう」

腹立たしげにつぶやきざま、手にせる  
錫杖を振り上げるや、強力義経を力ま  
かせにピシリピシリと続け打ち。

義経と見抜きながら、“打たれる判官殿  
も痛かろうが、打つ弁慶の胸の痛みさぞ

かし”と、主君を思う弁慶の心中に心打  
たれし富樫左衛門。

「疑い、いささかもあるべからず、早々  
お通り候え」

再び一行の通行を許します。

関所を抜けるや、弁慶、義経の前に両  
の手をつかえ

「殿、何卒、何卒お許し下さりますよ  
う」、流れる涙滂沱の如く、義経も目に一  
杯の涙を浮かべ、弁慶の手を取り

「そちのお陰で助かりしぞ、義経この通  
り礼を申す」

「へへっ、有難きお言葉にございます」

能の安宅から、三代目並木五瓶が台本  
を書き、天保11年江戸河原崎座初演。

七代目市川団十郎の弁慶で大当り、歌  
舞伎十八番、おなじみの勧進帳。ポポン

平清盛の五男重衡が焼き打ちした大仏  
殿を、重源が各地を募金して廻り、10年  
掛かって再建します。堂塔・仏像建立・  
修理のため、その趣意を書いて寄付を集  
めるのに使う帳面のことを勧進帳と申し  
ます。有名なお芝居の勧進帳ですので、  
そのあらましを書かせて頂きました。

紅涙をしぼるところですが、信頼しあ  
える主従であったことを読みとって下さ  
い。

企業の人事管理においても、信頼しあ  
える、理解しあえる上下関係を構築する  
ことが大切と思います。